

労働闘争のなかの文学

——三池と文化運動——

茶園梨加

はじめに—「サークル村」を端緒として

1950年から60年代初頭までは、各地で文化運動が盛んに行われた時期である。職場や地域でサークルが形成された。文学サークル、うたごえサークル、映画サークル、美術サークルなど、その種類はさまざまである。たとえば文学サークルではサークル誌を発行し、他地域のサークルと雑誌の交換などを通して交流を行っていた。そのような各地域での文化運動の中で、1958年創刊の「サークル村」（九州サークル研究会）は、谷川雁、上野英信、森崎和江、石牟礼道子が参加していたことで知られている。既存の文化運動に対して、「サークル村」は、党にも労組にも依存せず、独自の意思で集い行動する集団という特徴をもつ。集った者たちは、北部九州の炭鉱労働者たちや、「南九州」からは鹿児島島の農民たちなど、九州・山口各県の無数のサークルに所属する同人であった。「各分野にわたるサークル活動家を結集した、それ自身が一個のサークルであるべきおおきな会員誌¹⁾」であり、より広い共同体をつくることが理想とされていた。そのような独特な共同体のあり方や、職業作家ではない労働者が大部分をしめていた文化集団の存在自体に、今日にはない「文学」の姿があったと言える。

では、以上のような「サークル村」と三池はどのような繋がりがあるのだろうか。実を言えば、「サークル村」には、三池の労働者の参加が確認できない。「サークル村」は、九州全域と山口県を含めた大きな村であると、創刊宣言を書いた谷川雁は述べているが、そこに三池の労働者たちが参加していないのは不思議にも思える。なぜならば、三井三池に携わる大牟田・荒尾地域の労働者の数は、決して少ないものではなかったからだ。多くの労働者がいる中で、それでも「サークル村」に参加する者がいなかったのはなぜだったのだろうか。

「サークル村」は、福岡県中間市に発行所をおいていた。炭鉱に限って言えば同人は、上野英信が働いていた日炭高松や、後に大正闘争において大正行動隊、退職者同盟が結成された大正炭鉱、そして飯塚や山田、田川などの嘉飯山地区の炭鉱労働者たちであった。この筑豊と呼ばれる地域には、中小炭鉱が数多く存在した。その中小炭鉱に焦点をあてたのが、「サークル村」であり、また上野英信によるルポルタージュであった。つまり、筑豊炭田と深く関わっていた「サークル村」が三池をどうとらえているかを見ることは、筑豊から三池をみる視点を考察することでもある。

このような論者の関心を端緒として、本稿では炭鉱における文化運動のあり方を、三井三池炭鉱（主に大牟田地域）の文化運動に焦点をあてて考察をしてみたい。論じる手順としては、まず三池の戦後文化運動をサークル誌や組合機関紙から確認し、そこで求められていた文学の姿がどのようなものだったのか検討を行う。そして、「新日本文学」の作家たちによる寄稿や、「新

日本文学]、「サークル村」での三池に関する記述を踏まえながら、そこで共通して議論されていた集団創作のあり方や、文学サークルをめぐる状況の変化を考察する。内と外からの三池への視点を改めて確認することで、炭鉱における文化運動の様相を多角的に提示したい。最後に、私たちが今日、三池闘争を語る際の意義をもさぐることができればと考えている。

1. 戦後大牟田における文化運動

「サークル村」同人がいないからといって、大牟田や荒尾地域にもともと文化運動がなかったというわけではない。『大牟田文化史・年表』（発行大牟田文化連合会、編集大牟田文化史・年表編集委員会、1986年7月）掲載の大牟田創作協会野口晋一郎による「創作・詩概説」、「創作・詩年表」には、多くの文芸雑誌名が挙がっている。戦後に創刊されたものを1970年まで列挙してみると、「炉塵」²⁾「炭都文化」³⁾「緑地帯（ぐりーん・べると）」⁴⁾「灯影」⁵⁾詩誌「シビンチャ」⁶⁾「ピオネ」⁷⁾純文芸誌「新樹」⁸⁾文芸誌「貝群」⁹⁾「詩精神」¹⁰⁾「三池文学」¹¹⁾「荒尾ペンクラブ」¹²⁾「地方」¹³⁾「文学ひろば」¹⁴⁾詩誌「死角」¹⁵⁾第二次「三池文学」¹⁶⁾「天使魚」¹⁷⁾「斜莫」¹⁸⁾「るびこん」¹⁹⁾「叙説」²⁰⁾「ばがぼん」²¹⁾「塔」²²⁾文芸誌「土壌」²³⁾第三次「三池文学」²⁴⁾「反存在」²⁵⁾といった文芸誌が存在していた。

なかでも第三次「三池文学」では、早い時期に戦後大牟田周辺の文学運動に関する座談会が設けられ、第16号に議論の内容と、座談会の中心人物であった内田博による「座談会記事補足」が掲載されている²⁶⁾。そこでもやはり、数々のサークルが存在していたことが指摘されている。上記以外では、「干潟」²⁷⁾「光源」²⁸⁾「つどい」²⁹⁾「抵抗線」³⁰⁾「芽生え」²⁹⁾「炭鉱地帯」³⁰⁾「文学建設」³¹⁾といった名のサークル誌が発行されていたという。また、「三池文学」については第一次から第三次まで分けられているが、内田によると第一次は「全市の^マ文学人の総合的なものとして出された」という。一方、第二次は新日本文学会大牟田支部発行のものであった。

一言に文化運動といっても職場サークル的なもの、文学愛好者が集まったもの、地域サークルなどさまざまであった。なかには現在手には取れない雑誌も含まれており、ここでは一つ一つを検討することはできない³²⁾。だが、これほど豊潤な文学活動の磁場があったということが確認できる。さらに、労組のもとで発行されていたサークル誌としては管見の限りで、「いっく」³³⁾「ていぼう」³⁴⁾「協風」³⁵⁾「かつら」³⁶⁾「坑」³⁷⁾「円虹」³⁸⁾といったものが存在した³⁹⁾。

それらの中で、三川鉱文学サークル「坑」1号（1959年1月）に掲載されたきたむら・ちまを「文学サークルのこと」では、50年代後半に文学サークル運動が抱えていた問題が吐露されている。

三池炭鉱には短歌や俳句のサークルはずっと戦前から、いくつもあつて、一つがつぶれてもみんな絶えるということがない。／だが、小説・詩のジャンルでの、いわゆる文学サークルは育ちがたい。かつて「三池文学」があつたが、それはいまでいうサークルとは、やや異質であつた。それは多分に中央文壇の方をむいていた。／「炭鉱地帯」が一九五五年のはじめに出て、そこでかなり広い範囲で、文学をやる人びとを結集したが、短命だつた。職場だけでなしに、地域を基にした「文学ひろば」などがあつて、炭鉱や東圧や市役所や

染料などの労働者を結びつけた時期もあつた。／いづれにしても、根を張り、新しい、はたらくものの文学を实らせることはなかつた。(略)／労働組合は、年間の行動方針にサークル活動のことを採り入れ、サークルを指導援助すると書いている。しかし労働組合と各サークルの結びつきも思うようにいかないでいる。(略)組合はしかし、直接効果を求めてばかりいて、サークルの自主性を理解せずせつかちだと反撃される。注意していかねばならぬ(双方が)ことだといわれながらもこういう事になり勝ちなのである。

文学サークルでは、当時資金的に援助をうけていた労働組合との軋轢に悩まされていた⁴⁰⁾。60年を1年後に控え、合理化闘争も本格化しつつある時期に発表された記事である。闘争を前にして、組合から援助を受けていた小集団であるサークルは独自の意思で活動を行うことが困難となっていた。きたむらは、自分たちが文学サークルを立ち上げる意義を、「独占資本の植民地的な搾取」にたいして、「ほんとうの民族文化」というものを生み出さねばならないことに見ている。「ほんとうの民族文化」というものはもちろん「独占資本」の下では実らないが、同時に今のままでは労組幹部の指導の下でも実ることではないのではないかと問うているようにもとれる。やや穿った見方かもしれないが、文学サークルが労組から自立しようと動き出す萌芽をもここから見ることができるだろう。きたむらは言う。文学サークルの生み出す創作は、「ほんとうに労働運動と結びつき、日本民族の解放と運動と広くふかく交流」することで実る。警職法改悪反対の闘いで勝利を得たことを挙げながら、当時の労働運動において一つのトピックスでもあった原水爆問題にも触れていた。そのために「文学の場においてもたたかつていかねばならないのである。ぼくらの文学サークルこそすべての意味でヒューマニズムに依拠した集りである」と綴っている。警職法改悪反対運動や原水爆禁止運動などを共有の問題意識としながら、外部のサークルとどれだけ連携し、労働者自らの手による表現の場が形成できるかが課題であった。そして、それらの難問に直面する際の一つの方法として「文学」創作が考えられていた。

きたむらは、それまでのサークル誌について「根を張り、新しい、はたらくものの文学を实らせることはなかつた」と批評していた。では、以前のサークル誌においてはどのような文学が望まれていたのだろうか。

数年遡って50年代前半の記事をおってみることとする。1953年2月発行の「文学ひろば」創刊号では、出海溪也が「魂の解放をうたう文学を一さいきんの大牟田の文化運動をめぐつて一」のなかで、他の文化運動に比べると文学は遅れていると指摘していた。GHQの占領が解かれた52年、大牟田の文化運動は一つのきっかけを得る。大牟田映画サークル協議会が同年6月に結成されたことが大牟田の文化運動の事実上のポイントになった。同年11月に大地評⁴¹⁾、平和委員会、学生自治会、婦人会など約50団体共催のもと行われた赤松俊子、丸木位里共作の「原爆の図」展に大牟田映画サークルも関わっていた。約3万人の市民が来場したと言われている⁴²⁾。これに端を発し、働く者自らが文化運動を行う機会が増えるようになる⁴³⁾。文学はというと、それまでも職場や地域でサークルが作られ雑誌が出されてきたが、狭い範囲でのことであった。そのような状態のなか、三川敏、製作所、三池合成、東庄、三池染色、高等学校の教員、新日本文学支部、人民文学支部などのメンバーが集まって、「大牟田の市民大衆の共通の文学広場を

つくつて、文学運動をおしすすめてゆこう」ということで作られたのが「文学ひろば」である。つまり、映画サークルやうたごえサークルなどが活発になるなかで、文学サークルでもまた、個々のサークルが連携し、より大きな運動体として再結成されつつあったのである。大牟田という地域特有の状況を言えば、「三井の植民地」つまり「文化的不毛地」と言われてきたが、先に挙げたように52年ごろより、「ひとびとが表現の解放ということを要求しはじめたことが（略）今後の文学活動の前提」であった⁴⁴⁾。

特に、その中で新たに試みられたことが集団創作であった。「文学ひろば」では、52年8月以降の113日の首切反対闘争⁴⁵⁾に取材した編集部集団創作「ルポルタージュ 怒れる炭鉱労働者」が創られた。首切状が届いた際の個々人の様子や、デモを行う炭婦協の女たちの様子が綴られている。この「文学ひろば」の後に続くサークル誌であった「炭鉱地帯」では、「文学ひろば」での集団創作以降、数々の集団創作が生まれたことが指摘されていた。同人は、劇団はぐるまのメンバーとともに集団創作した詩をメーデーやうたごえなどで朗読するといった活動をおこなっていた。

それでは、集団創作の重要性はどのようなところにあっただろうか。同号に掲載された大牟田詩研究会による集団創作詩「平和を守れ—平和の夕大会（敗戦記念日）の朗読—」⁴⁶⁾をもとに見てみよう。この詩は、掲載誌4頁分にわたる長い詩となっている。まず最初に日本の敗戦の記憶が語られる。その後、方言で「おつどん百姓」から「大牟田の働く仲間たち」に、自分たちもまた平和の希望を叫ぶ存在である、と詠われる。そして、今度は炭鉱労働者のほうから応答の形で、労働と生活の苦しみが詠われる。続いて炭鉱労働者の語りで、反原発、反戦争が叫ばれる。方言交じりで表記されているのはここまでである。最後に、標準語に戻り、「大牟田の皆さんよ／日本のみなさんよ／そしてアメリカの友だちよ／世界の仲間たちよ」、「戦争をなくすために／おたがい／生命のことはを交わしあおう」と呼びかけられている。最終部分は、平和運動で読まれる詩の典型的とも言える表現になっておりやや単調だが、中間部分はそれが「平和の夕大会」で朗読されたことを考えると、この詩自体が集った者たちへの呼びかけになっていることが分かる。雑誌掲載の文字として綴られた詩とは違い、集会での朗読用に創作されたそれは、声に出して読まれ、またそれを受け取る聴衆がいることで、うたごえで歌われる詞／詩と同義の役割を果たしたであろう。つまり、サークル誌に詩を掲載した作者と、読者の関係とは異なり、朗読詩は詩が詠まれる空間を共有することに力点が置かれる。集団で共に詠う／歌うという意味で、うたごえ運動と共通するのである。

2. 組合機関紙からみる文化運動の広がり—文学とうたごえ運動—

以上見てきたように1952年から53年にかけては、文学サークルが発行していたサークル誌において、集団創作が一つの鍵となっていた。一方、50年代後半になると他媒体において、文化運動の様子が確認できるようになる。

三池では、サークル誌とは別に三池炭鉱労働組合発行の機関紙も存在していた。機関紙「みいけ」⁴⁷⁾誌上に掲載されていた「みいけ主婦会」（三池炭鉱主婦会）では、たびたび詩や短歌などが掲載され、文芸特集が組まれることもあった⁴⁸⁾。「みいけ」第586号（1959年8月16日）、

第 587 号（1959 年 8 月 23 日）「夏季文芸」では、創作（荒木精之選）、詩（出海溪也選）、短歌（岩本宗二郎選）、俳句（後藤是山選）、川柳（速水真珠洞選）、感想文、写真、児童つづり方の上位入賞作品が掲載されている。例えば、短歌入選一席の山西光一の歌「徹夜して積みたる石炭二十函吐きても吐きても出づる黒き痰」は、坑内労働の過酷さを黒い痰で表現する。「吐きても吐きても」出てくる「黒き痰」は、同時に一晩で「二十函」も採れる石炭にも重なっている。掘られた黒い石炭の代償として、「黒き痰」は底なしに出てくる。しかしそれ自体は何かのエネルギーに代わることはない。坑内労働者の職業病ともいえる塵肺が連想される一首だ。二席に選ばれた藤本盛登の歌「賃金遅払に憤るわれら腕組みて低音にうたふ三鉱労組のうた」、秀透の永松運造「会社前広場をうめしデモ隊の「団結頑張ろう」と拳つき上ぐ」など、デモの様子を題材とした歌もある。

各々のジャンルの掲載作品を挙げればきりが無いのだが、なかでもここで注目したいのが、創作入選一席の左藤臣芳「赤いばらのコーラス」である。メーデー前夜祭で吉村をリーダーとした Y 鉱青年行動隊コーラスは自分達のうたごえを披露する。だが、「声のコントラストが乱雑で」失敗に終わる。アコーディオンの坂本はそれ以来活動に参加しなくなっていた。「三井三山、六千名の人員整備案が提出され」ていた時期でもあった。争議は十七日間のストで終止符をうち、首切りは「あくまでも希望退職となり各山で協議交渉という新段階」となる。争議の間、「組合員に元気をつけろ、歌声運動でよゆうを持たせろ」という想いから「コーラスに馬力を賭けるのだが、楽器がないのが致命傷だつた」。吉村は思う、「やはり労働歌も音楽である以上、その魅力は旋律である。怒鳴りたて、ばかりいてもあきがくるのは解りきつたことだ」。だが、坂本からは「吉村さん、あんなコーラスは子供だまですよ」と言われ口論となる。その数日後、坂本が坑内で負傷し入院することになった。坂本は罰があたったと考えるようになる。坂本の改心後は物語の展開が早い。退院の前日に見舞いに来てくれたコーラス部員の前で久しぶりにアコーディオンを演奏してみせる。「やはり美しい旋律だつた」。感動のまま物語は終わる。予定調和的なありふれたストーリーであることはいなめない。だが、ここで問題にしたいのは、うたごえ運動に関わる者が、うたごえは単に「怒鳴りたて、ばかりいて」はならず、歌の技術を向上していかなければいけないと自覚している点である。運動の手段としてだけでは捉えることのできない、うたごえ運動の民衆芸術、集団芸術的な側面を指摘している。作中に表記される「歌声運動の威力」とは、歌詞はもちろんだが曲の旋律や発声にも宿っていることが読みとれる。

他にも、うたごえ運動の様子が文芸作品の題材となる事例はある。詩の分野で「佳作四」に選ばれた稗島廣「一本の赤い糸」も、うたごえ運動を素材にした詩であった。

歌の中の歌を想う／オタマジヤクシマークの／忘れて往つたどうこく／五線譜の中の白い空間に／聞こえる／断章と不協和音の吐息／フォルテ フォルテ／レクレツSEND／そして沈黙／／だが歌声は響き／こだまはこだまし合う／黒い恐怖と怨みの炎を／十四年のテクニクで歌うのだ／島は今風土病の季節／かぜを引いた連中は／エレジーを喜びのリズムで唱う／というのだ／そいつは誰／麦飯の替りにドルを喰う男たち／奇妙だと思ふ？／そんな事は職業安定所じや常識／／激しい憤怒を起せ／歌声は常に初まつたばかり／今こ

そ歌の中の歌を想う／歎きをつむぐ一本の赤い糸を想う。

歌の中の歌、つまり歌われる詞がうたごえ運動のなかで歌われるときに溢れ出す「嘆きをつむぐ一本の赤い糸」を大切にしたいという作者の想いが伝わる作品である。ここでの「嘆きをつむぐ一本の赤い糸」は、上記の「赤いばらのコーラス」を踏まえれば、詞の力強さとともに旋律の重厚さからも生まれるものであるだろう。そして集団で歌うことで「こだまがこだまし合」い互いの嘆きを「一本の赤い糸」につむぐ。そこから集団芸術としての美しい旋律が生まれる。これらうたごえ運動を題材とした作品から分かることは、まず個々のサークル、もしくは文化運動の各々の分野が、繋がりをもちながら運動が形成されていたということである。さらに、うたごえ運動を素材とした文学作品が機関紙に掲載されることで、うたごえ運動の意義、そしてうたごえ運動をする者の葛藤を広く伝える意味もあったと言えるだろう。

よく知られているように、三池のうたごえ運動家荒木栄の歌は、他地域の炭鉱ではもちろん全国のうたごえの祭典でも歌われていた。1958年の第6回九州のうたごえは、大牟田市体育館で開催され、5,000名の参加があったという。合同曲は「砂川」と荒木作曲の「子供を守る歌」である。1960年8月には第2回西日本のうたごえ祭典が三池炭鉱ホッパー前で行われ、合同曲として「炭掘る仲間」、荒木作曲「三池の主婦の子守歌」が選ばれた他、「がんばろう」「守れホッパー」「俺たちの胸の火は」なども歌われた。参加者は約6,000名であった⁴⁹⁾。水溜真由美は、当時全国的に展開していたうたごえ運動について以下のように指摘している⁵⁰⁾。

炭鉱におけるうたごえ運動は一九五三年頃開始され、一九五五年にかけて飛躍的な発展を遂げた。これは、全国的なうたごえ運動の展開とほぼ歩調を合わせた動きであった。各炭鉱に組織されたうたごえサークルは、全国あるいは各地のうたごえ祭典への参加を主要な契機としながら発展した。(略)うたごえは様々な文化運動の中でも、とりわけ労働運動と関係の深い運動であった。

うたごえ運動が広範囲に、しかも一定の耐久性をもった運動として浸透したことを踏まえると、文化運動のひとつであった文学に及ぼした影響は大きかったに違いない。その影響とはおそらく、先に挙げたようにうたごえ運動を題材とした文学作品の創作と、朗読詩が受け入れられる磁場の形成であっただろう。特に大牟田における文学サークルでは、52年ごろから集団創作について議論がなされていた。水溜が指摘したように53年からうたごえ運動が盛んに行われたことを考えると、文学サークルにおける集団創作は53年のうたごえ運動の高まりをとおして発展していったと推測できる。また、58年から60年にかけてはうたごえの祭典が大牟田市で行われ、大きな盛りあがりを見せた。その状況に関連するように、組合の機関紙ではうたごえを題材とした創作が掲載されたのであった。

3. 機関紙「みいけ」に寄稿する作家たち

このような集団創作や集団芸術の議論は、新日本文学会に所属していた作家たちの言説にお

いても確認することができる。三池闘争が本格的に盛り上がりを見せる1960年には、機関紙「みいけ」紙上に野間宏、佐多稲子といった名が散見されるようになる⁵¹⁾。

野間宏は、「危険な条約、の調印 さらに強く阻止・廃棄の闘いを⁵²⁾」の中で、調印された新条約について、発効を防ぐために批准を阻止することを主張する。「この可能性如何にしてもさぐり出すためには、「新安保条約阻止の道が、日本の繁栄に通じていることを具体的に明らかにすること」、「政治の領域に於てもこの具体的な進行のプログラムを出して行く」ことが重要である。そして、「これらすべてをすすめる日本人の思想の領域におけるプログラムが明らかにされなければならず、それによって新条約阻止の運動は「日本の繁栄を約束するものとしてひろく国民全体の力を集めることが出来る」、と述べた。三池の炭鉱労働者たちにとっても重大関心事であった新条約調印に関して、文学者として野間が述べた言葉は、同時に文化運動が行われる際の一つの意義とも繋がっている。前述の「赤いばらサークル」、「赤い糸」のように、聴く者も巻き込むような旋律（＝歌の中の歌を想うこと）を習得することは、「日本人の思想の領域」にある国民文化を明らかとし、「国民全体の力を集める」という壮大な意義にも結びつけられる。

実際に野間は5年前の1955年三井三池炭鉱を訪れ、大牟田の文学文化団体と座談会をもっている。野間は、同年2月に約20日間にわたる九州巡回講演を行った。大牟田では、14、15日両日に市民会館で約1,000人の聴衆の前で講演会を開催し、大地評（注41に同じ）や東庄労組青年婦人会、文学・文化団体などで座談会をもったという。サークル誌「炭鉱地帯」編集部では、「雑木林」「つどい」、映文協などと共催で約40名が集まり座談会を行った⁵³⁾。長崎、佐賀、柳川を巡り、大牟田へ来た野間は、「一番大牟田で動き、息吹とい、ますか文学的な力に触れることが出来たと感じている」、「全国的にこういう状態をもたらし得るといような希望が持て、来た」と語る。

小説の場合の集団創作というものは非常に難しく思うが、その前に映画のシナリオ等に出てくる紡績の女工さんたちが今一番沢山やつている生活記録を書いてゆこうという会が職場で出来る。そうするとみな作品を書いて読み上げる、その書いたものを全員が意見を出して間違いを正しく直してゆく。そうすると批評された意見に従ってまた書直す。そして全体の意見で高まったものになっている。それは一人で書いたものではなくて全体で書いたものになる。そんなやり方が出てきている。集団創作の欠点は、一人々々に話合う時に自分の欠点を隠して意見だけだして、その上で作品が出来上るかも知れない、こうなると本当のものは作れない。例えば自分が今家庭の中で悩んでいることがある、そういうのは恥しい、それを隠して意見だけ出しているというのが集団創作の今までの欠点として出ている。

うたごえ運動とは異なり、文学作品を集団創作する場合はある困難をともなう。それは、文字を書く主体は一人であるからである。だが、書く行為を集団の中においた時、例えば生活綴方で行われていたように「読み上げる」という行為が必然的に必要となる。「読み上げる」行為を解して、新たに物語が紡がれ、集団創作が行われるのである。また、大牟田詩研究会による

集団創作詩「平和を守れ—平和の夕大会（敗戦記念日）の朗読—」に見たように、読み上げられる（＝朗読される）ことで完成する作品もある。だが一方で、個人の体験、つまり野間の言葉を借りれば「欠点」としての体験をどのように集団創作の場に出していいのか、という問題も依然残る。集団になった際に消される個人の体験をどのように、昇華すべきか。そのためには、自己の体験を隠すことなく意見する、つまり単なる批判ではなく、互いに批評する力が必要とされたのである。国民文学を提唱していた野間にとって、「炭鉱地帯」への訪問はその実践だったとも言えるだろう。

三池を訪れた作家として、佐多稲子の名前も挙げるができる。佐多は1960年1月に総評の文化オルグとして訪問し、主婦会と懇談会を開いた。「現地にいつて闘いの実態を直接見て勉強したいということで来山した」⁵⁴⁾という佐多は、翌月2月21日の機関紙「みいけ」第612号の「みいけ主婦会」で、「力づよい主婦たちの闘い 三池の闘いをバックアップするもの」を寄稿した。当時、指名解雇を受けていた1,200名は通達状を返上して拒否していた。「三池炭鉱四ツ山」でも43名が就労を拒否して座り込んだ。警察との衝突をさけるために就労強行は避けていたのであるが、その際に他の場所から配置転換者が会社の業務命令で入り込んできていたのである。配置転換者と一緒に就労すれば会社のやり方を認めたことになるとして座り込んだのであった。

三池一万五千名の労働者に対し千二百名の指名解雇が通達され、それを拒否する全体の闘争である解雇拒否の闘争は、解雇を受けたものだけのことではない。残るもの問題なのである。このことが主婦会の奥さんたちの座談会でもはつきりつかまれている。(略)自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれているのに感動した。／だから主婦会でも、解雇拒否者と、全体の人との間に何の感情のちがいもないという。

ここで言われている、「自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれている」ということは、もちろん就労拒否問題について述べた言葉である。しかし、それと同時に文化運動について述べている文脈でも当てはまる。つまり、集団で創作活動を行う文化運動は、「自分というものが」「全体との関係で広く正しくつかまれている」なければ、破綻をきたす。このような中央作家との「対話」を通して、地元の文化運動家たちが一層奮起したことは想像に難くない。当時、1950年代半ばから新日本文学会が目していたリアリズムの手法、そしてルポルタージュとしての文学のあり方と呼応し、炭鉱労働者のサークル運動と新日本文学会という中央文壇の蜜月の時期であった。その方法が、三池闘争、安保闘争に沿って集団で自分たちの思いを伝える際に、言葉を紡ぐ作業である「文学」が多くの役割を担った。佐多の言葉を借りれば、指名解雇反対闘争が「自分というものがここでは全体との関係で広く正しくつかまれ」ることを要したように、集団創作自体も個人と全体との関係を正確につかむことが必要とされたのである。

4. 外部からの批評

一方、「新日本文学」誌上では、三池労組に対する批判もなされていた。「三池」を訪問した

針生一郎は、組合とサークル運動の関係について以下のように記している⁵⁵⁾。

組合直営の限界ということでは、文学サークルのリーダーだったKさんのふともらしたことがうかんできてる。「三池には昔から組合至上主義みたいなもんがあつてね、サークル活動の育たんとこですたい。」(略) 学習サークルでも概していえば、少人数で自主的に発足し、ある期間つづいたものの方が、柔軟な感覚に裏づけられた、早産でない思想をつくりあげている。「歌ごえ」をのぞくこれらすべてのサークルがつぎつぎに閉塞し、組合公認の思想の特効薬だけが普及した、—といえは言いすぎになるが、これは大企業の比較的つよい組合が、この二三年共通にたどってきた道程なのである。

前述のように、三川鉦文学サークルのきたむら・ちまをは、「[文学サークル]のこと⁵⁶⁾」で、サークルと組合の関係が上手くいかないと綴っていた。それは約1年半以上前の1959年発刊の雑誌記事であった。針生の言葉から判断すれば、三川鉦文学サークルから出されていた「坑」はおそらく後に休刊になったと想像できる。50年代後半に労組機関紙で文芸特集が組まれる一方で、文学サークルの運動は翳りをみせるのである。

針生は、続けて新港社宅についても述べている。「もっとも戦闘的」だとされる「新港社宅」では、長い間沖仲仕の仕事を負わされてきた与論島出身労働者たちのコミュニティーでもあるという特徴を挙げ、その独自性を指摘している⁵⁷⁾。さらに、活動家層の基底には、屈折した心情をまだ十分に論理化しえない多くの下積みの人びとがいる、そこにふくまれた抵抗のエネルギーをどう理論と組織に媒介するかがひとつの問題であると言う。三池の闘いが組織的な抵抗の条件さうばわれている中小炭坑の労働者や、炭坑を追われた多くの失業坑夫の問題と、結びつく通路でもあるが、それをうまく行うためには、「文化運動のプログラムが必要」だと指摘している。というのは、「味方の内部のさまざまな矛盾をきめこまかに吸いあげてゆくスタイルが、新しく工夫されなければならない」。つまり、大企業の組合とサークル活動の関係から、具体的文化運動のプログラムが必要とされており、そこから、味方内部の矛盾をも抽出すべきだと指摘する。機関紙「みいけ」では記されない「三池」の現状であった。自分たちの集団内部をも批評する力こそが必要であったのである。

針生の述べたことは、谷川雁が記した「ミイケはどこへ行ったか」という文章とも連鎖していた。1961年、三池闘争終結後の文章である。「ミイケ」とは、「安保とならんで全戦線の矛盾の焦点であるとともに、それゆえに憤怒を結集することがある程度可能となった労働者階級の実力闘争の、戦後十五年間における最高の表現であった」。だが、筑豊の各炭鉦では合理化闘争がごとごとく敗北に終わり、なおも「闘えと上部に迫っている」余力を残した大衆がいるにもかかわらず、「つねに炭労中闘と山元幹部の人工的操作によって闘争がうち切られている」。「さらにこの敗北の原因がなんら冷静な検討を経ることなく、敗北と判定することすらどことなく憚られるような、あいまいな論理で包みかくされていること」は、すべて三池闘争の終結のしかたにあると述べる。このように、「三池」闘争から派生して、他の中小炭坑でのそれぞれの闘争を谷川は「ミイケ」と表現した。そして、いわゆる三権である争議権、交渉権、妥結権を中央闘争委員会に「集約」している労働組合というものが必然的にうみだす罪悪をも指摘する。「も

し合理化闘争にあたって山元に完全な三権が与えられ、したがって山元幹部の責任が炭労をかくれみのにしない形でむきだしにされていたならば、三池以後の合理化闘争のいくつかはもっと強靱な抵抗を示したであろう。さらに妥結か否かの意志決定が全組合員の直接投票によってなされるならば、事態はいっそう変化したであろう。つまり、谷川は、労組からも自立して闘うことの必要性を指摘しているのである。この指摘は、筑豊炭田という外部から「三池」を見た際に可能となった視点であった。

その少し前の1960年6月に発行された「サークル村」第3巻第5号では、「三池から吹いてくる風」という特集が組まれていた。そこで谷川が「反暴力」と題し述べていることは、三池の労働者たちが、上からの組織化をひとつずつ剥いでいく過程を通過しようとしている、ということであった。炭鉱労働者の地金をとらえて民主主義に探りを入れられつつある。だが、「坑夫の地金を食いあらしているのがわれわれの文化活動ではないか」と自己批判的に述べている。「坑夫の地金」をどのように「受容し、かつ拒絶するか」。「サークル村」は、自己の二重性に自覚的であろうと努めていた。

これまで述べたように、三池には数々の文化運動が存在していた。1952、53年には、求心力をもったうたごえ運動と共に、文学サークルでは集団創作が試みられていた。つまり個人ではなく集団を主体とする文学が試行されていた。そして個人の意見をいかに複数人の経験として昇華するかという議論からは、批評する力が必要とされていた。だが、58年以降、うたごえ運動の盛り上がり一方で、労働者たちによる自らの文化運動は、三池闘争という大きな渦の中で、労働組合に吸収されたかたちで存在していたのである。

1960年の三池闘争とは何だったのか考える際、炭鉱労働者たちを一面的に捉えることは危険性を伴う。だが、針生や谷川が述べたことを踏まえればこう言えるのではないか。集団の内部が実は重層的で複雑にあるということを自覚し批評する力を持ち得るならば、「私」は三池闘争で持ちこされた課題に応えることができる、と。何かしらの組織に頼るのではなく、自立し自己の表現をもったところで初めて闘争の主体となりえる。各々が自立した主体を獲得しえたとき、集団創作の主体もまた、おのずと立ち上がってくるのであった。これは、1960年前後の問題でありながら、三池闘争から50年後の「私」の「ミイケ」に向けられた課題でもある。

付記

本稿は、『上映&シンポジウム 三池—終わらない炭鉱の物語』での研究報告をもとに加筆し論文化したものである。本文引用では、旧字体は新字体に適宜改めた。

注

- 1) 「創刊宣言 さらに深く集団の意味を」, 「サークル村」第1巻第1号, 1958年9月20日。
- 2) 三井東洋高圧大牟田工業所文芸部機関誌, 編集厚生課北原仁美, 1948年6月。
- 3) 発行所大牟田市有明町69〈くろだいや編輯部内炭都文化クラブ〉編集兼発行人, 大森淳義, 1946年6月, 第6号(1947年4月)は発行人が三池炭鉱労働組合となっている。1948年8月発行の第12号をもって終刊。「その内容は創作・詩は勿論のこと, 音楽・美術等と, 一種の総合誌の観を呈した」(『大牟田文化史・年表』317頁)。
- 4) 文芸同人誌, 発行所双樹社, 編輯兼発行者中島立雄, 1946年10月, 「翌22年12月1日, 第3号が

労働闘争のなかの文学（茶園）

- 発行されるまで見届けているが、あとはどうなったであろうか」（『大牟田文化史・年表』318頁）。
- 5) 発行所三池郡高田町渡瀬出海方，発行人出海溪也，1946年11月，後に「桃源」と改題。同人に「当時立命館大学教授で歌人の国崎望久太郎も名を連ねている」（『大牟田文化史・年表』318頁）。
 - 6) 熊本県荒尾市，編集発行人雪野一平，1947年8月。「13号まで続き，昭和24年1月終刊」。
 - 7) 「詩郷」改題，発行所三池郡高田村渡瀬（詩郷社），編集発行人出海溪也，1948年3月。
 - 8) 発行所大牟田市大字橘245新樹文学同好会，編集兼発行人，石田清明，1948年5月。「現九電，当時日肥筑支社の文学愛好者達が発行したもの」（『大牟田文化史・年表』319頁）。6号まで続いた。
 - 9) 熊本県荒尾市，1950年3月。1951年3号で終刊。
 - 10) 発行所福岡県瀬高局区内太神943二十世紀クラブ，編集人中島宏，1950年4月。
 - 11) 発行所大牟田市原山町，三井三池鉱業所人事部厚生課（三池文学会），編集発行人本吉進，1950年4月。「前述の「緑地帯」より幅広く同人層も厚くなっているが，一面から言えば，三井三池鉱業所内（後に人事部労働課）の発行で，ある意味では，福利厚生のな趣きもあったであろう。でも，全市的に同人も網羅され」（『大牟田文化史・年表』）た，という。
 - 12) 熊本県荒尾市，1950年5月。「翌26年7月まで9号続いているが，メンバーは前述の「貝群」と重複している」（『大牟田文化史・年表』322頁）。
 - 13) 発行所大牟田市原山町，編集発行人中島立雄，1952年4月。
 - 14) 発行所大牟田市有明町48文化タイムス社内，編集人出海溪也，発行人小宮市太郎，1953年2月，創刊号のみ。
 - 15) 吉村三生方，1953年8月。
 - 16) 発行所大牟田市大字田隈264，編集兼発行人武藤泰春，1955年9月。新日本文学大牟田支部の機関誌として発足した。
 - 17) 発行所大牟田市鳥塚町165，編集兼発行人乾健太郎（本名黒田久太），1956年9月。同人は「すべて市内の中学教師」（『大牟田文化史・年表』324頁）。
 - 18) 発行年月日など不明。「佐賀より洋画家の皆島万作を慕ってやってきた中村邦が，ヤング達を集めて主宰した雑誌であった」（『大牟田文化史・年表』324頁）。
 - 19) 発行責任者，平野隆良，1957年4月。第3号（発行年月日不明）まで続いた。
 - 20) 発行所大牟田市汐屋町187，編集兼発行人福富鷹志，1957年7月。創刊号のみ。
 - 21) 発行所大牟田市大字三池614-2，編集人中村邦，発行人大佛辰雄，1957年8月。1960年2月第7号まで発行，「塔」と合併。
 - 22) 発行所山門郡山川村尾野1690，編集発行山下邦夫，1957年10月。
 - 23) 熊本県荒尾市，編集人山野真樹，1960年7月。
 - 24) 編集兼発行人内田博，1962年3月。通号「第39号を同（1982）年8月15日発刊，以後は発刊を見ないようである」（『大牟田文化史・年表』329-330頁）。
 - 25) 編集「反存在」同人，1966年4月。様々な文芸誌が発刊されたが1955年以降では，「塔」と「三池文学」二つに安定したと見られている（『大牟田文化史・年表』326頁）。
 - 26) 「座談会 戦後三池の文学運動—内田博に訊く—」。出席者は内田博，武藤泰春，小宮隆弘，河口司，汾浩介，永江武一郎，藤川英明，古里俊雄であり，古里が速記を担当した。
 - 27) 「二一年後半，大牟田の全歌人を総合したもの」（前掲「座談会」，内田談），発行年月日などは不明。
 - 28) 内田によれば新日本文学会支部として出していたという（前掲「座談会」）。
 - 29) 「つどい」「抵抗線」これらの発行年月日，発行者などは不明。座談会によれば，ガリ版刷りの雑誌であったという。座談会では「新日文の支部機関紙，友の会の機関紙と云うことで出したのが芽生えじゃないのですか。その前が抵抗線でせう」という武藤泰春の発言もある。「芽生え」については，人民文学大牟田支局発行（内田博「座談会記事補足」前掲）であった。
 - 30) 「炭鉱地帯」，発行者三池炭鉱労組，創刊号（1955年1月），2号（1955年3月）。

- 31) 発行年月日、発行者など不明。武藤泰春によると市役所発行のものであったという（前掲「座談会」）。
- 32) 今回は便宜上戦後のみを取り上げたが、内田博を中心として昭和初期からの大牟田におけるプロレタリア文学運動はいずれ把握しておかなければならないだろう。また、戦後について言えば、内田は大西巨人や井上光晴とも交流があった。稿を改めて論じたい。
- 33) 三池炭鉱労組三川支部外来一区連合会、15号（1957年5月）、16号（1957年7月）。以下、組合サークル誌発行年月日については、同様に確認できた号数のみ記入する。
- 34) 三川鉱新港社宅（三池炭鉱労組）、発行者内山孝之助、編集者今田実光義、5号（1957年5月）、6号（1957年7月）。
- 35) 大砂地域分会、13号（1957年8月）。
- 36) 三鉱労組三川支部、編集発行責任池田昭二、8号（1957年6月）、9号（1957年8月）。
- 37) 三川鉱文学サークル、発行所大牟田市白井新町一丁目、発行人北村瞳、編集人杉本一男、印刷所三鉱労組印刷工場、1号（1959年1月）。
- 38) 三池労組俳句サークル、発行所熊本県荒尾市緑ヶ丘弥生町26棟三池労組俳句サークル円虹の会、編集発行田中未草、印刷外井秋穂、104号（1961年6月）。
- 39) 組合の文芸誌については、『大牟田文化史・年表』では全て網羅されていない。法政大学大原社会問題研究所での調査の結果本文記述のサークル誌を確認できた。資料閲覧の便宜を図ってくださった法政大学大原社会問題研究所にお礼申し上げます。
- 40) 水溜真由美「炭鉱におけるサークル運動の展開—文学サークルを中心に」（前）／（後）（『国語国文研究』133、2007年12月／134、2008年3月）を参照。
- 41) 大牟田地方労働組合評議会の略。総評の下部組織で大牟田市と荒尾市にあり、それぞれ「大地評」「荒地評」と呼称している（『みいけ』三池炭鉱労働組合、1959年2月、10頁参照。この「みいけ」は、機関紙「みいけ」とは異なり、冊子状のもの）。
- 42) 「原爆の図」巡回展については、岡村幸宣「『原爆の図』全国巡回展の軌跡」（『原爆文学研究会』8号、2009年12月）に詳しい。岡村によれば、大牟田市では1952年12月5日に吉田早苗・野々下徹による「原爆の図」の巡回展が開催され、来場者は約27,000人であった。
- 43) 出海の紹介に即して挙げていけば、同年12月には中国映画「白毛女」の無料上映会、53年1月には映サ協の「市民映画コンクール」、2月には劇団「カチューシャ」公演（社会タイムス主催）、炭労自主製作映画「女ひとり大地を行く」上映にあたり製作スタッフの来牟と座談会、メーデー前夜祭では、黒崎地方の民謡と踊り、劇団はぐるま初公演「乞食の歌」、表現座や労組演劇部の演劇、製作所の職場合唱団のコーラス、映画など労働者自らの手による祭典が行われた。これを機に、文化連絡協議会が作られるようになる。（出海溪也「魂の解放をうたう文学を一さいきんの大牟田の文化運動をめぐって—」、『文学ひろば』創刊号、5-6頁）。
- 44) 「魂の解放をうたう文学を」、6頁。
- 45) 1952年12月27日、闘争は組合側の勝利に終わる。
- 46) 出海溪也「集団創作の可能性について」（『炭鉱地帯』創刊号、8頁）によれば、この詩は松尾晴輔（三池炭鉱）武田千秋、松田利勝（三池合成）坂本越朗（東庄）木下梅晴（手鎌部落）平野恵子（映画サークル）と出海溪也で創作したものだという。
- 47) タブロイド版、大半が四面構成、週刊、約二万部発行、一部約二円五十銭、配布方法は全組合員対象。集団社宅（約一万名）は三輪車にて家族に配布。その他は職場にて配布、残余は対外的に配布。また、編集スタッフは、「編集部長と書記一名が中心となる」。「昭和二十二年いらい印刷工場を本部内に自家経営」し作製していた（『みいけ』三池炭鉱労働組合、1959年2月、を参照。）。
- 48) 「みいけ主婦会」は機関紙「みいけ」同紙面上に掲載。機関紙全体の第四面に「みいけ主婦会」が掲載されることが多かった。
- 49) 『九州・福岡のうたごえの半世紀・記念誌』編集発行記念誌編纂呼びかけ人会議、後援九州のうたご

え連絡協議会，2006年10月27日を参照。

- 50) 「一九五〇年代における炭鉱労働者のうたごえ運動」, 「北海道大学文学研究科紀要」2008年11月。水溜の論文は，うたごえ運動の実態を把握する上で重要な先行研究である。九州と北海道の炭鉱を事例として挙げながら，中央合唱団，労働組合，地域におけるうたごえサークル運動を踏まえ，うたごえ運動が活発化したプロセスを論じている。また，うたごえ運動が労働運動と特に関係の深い運動であり，団結強化のために果たした役割は大きいことを指摘している。大牟田のうたごえ運動についても詳しく述べられている。
- 51) 機関紙「みいけ」第600号（1959年11月22日）では，「みんなで立上ろう 安保改定反対で文学者は発言する」と題し，大江健三郎「独立と自由」と中野重治「再び誤るな」を掲載している。これは，同年10月15日に行われた「新日本文学会の安保改定反対の夕講演会」での発言を集録したものであった。
- 52) 機関紙「みいけ」609号，1960年1月31日。
- 53) サークル誌「炭鉱地帯」第2号（三池炭鉱労組，1955年3月10日）の「新しい文学の方向—野間宏氏を囲んで— 大牟田各文学文化団体座談会」（「炭鉱地帯」第2号，発行三池炭鉱労働組合本部内炭鉱地帯文学会，編集発行人北村千麻夫，1955年3月）には，当日の様子が記録されている。座談会は1955年2月15日夜，大牟田地方労働組合評議会の会館二階で行われた。野間宏は，他にも上野英信が働いていた日炭高松（遠賀郡水巻町）も訪れており，やはり座談会が開かれていた（拙稿「戦後サークル誌にみる文学の役割—北部九州のサークル誌① 日炭高松—」「九大日文」13号，2009年3月，を参照）。また，長崎芽だち文学サークルでは，同55年2月11日午後6時から引地町労働会館にて，「講演と映画」と題し，「講士」に野間を迎え，映画「真空地帯」の上映が行われた（当日の「会員券」を参照。資料を提供して下さった上野朱氏にお礼申し上げます）。なお，長崎芽だち文学サークルについては，楠田剛士「山田かんとサークル誌」（「原爆文学研究」8号，前掲），同「長崎戦後サークル誌「芽だち」総目次」（「九大日文」15号，2010年3月）を参照。
- 54) 「闘いを本にしたたい 佐多さんを囲んで懇談 宮原」, 機関紙「みいけ」第608号，「みいけ主婦会」1960年1月24日。
- 55) 「三池コンミュン」, 「新日本文学」1960年9月。
- 56) 前掲「坑」1号，1959年1月。
- 57) 森崎和江は「生のはじめり・死のおわり」（「辺境」2号，1970年7月）のなかで，「三池炭坑における六〇年の闘争は，三池に移住していた与論という小宇宙のなかに，分裂をもたらした。（略）三池労組に残る者，第二組合へ移る者が出たし，それがほとんど親戚縁者関係となる人々であったから，その傷は大きかった。人々はこの階級意識を軸にした分裂にふれることを，彼ら集団内でのタブー化して，その第二の与論を守ろうとしている」と述べている。移住労働者たちに対し行われていた差別はもちろんのこと，労働組合に対する一つの批判として捉えることができる。また，谷川雁に至っては，「昭和初年までここでは囚人労働が行われていたし，また沖縄に接する与論島の出身者がある種の区分された意識をもって密集している居住地もある。このような深部に滞留している土着的エネルギーと擬似市民主義とが一定の微妙な間隔を保ちながら無葛藤に共存していたのが三池の団結の内容であった。もしこの双方が単に情念的に対立するならば三池労組の統一はさらに早い時期に崩壊していたであろうし，またこの断層をそのままにしているかぎり，統一の実体がきわめて形式的な限界にとどまるのも当然であった。」（「定型の超克」, 『民主主義の神話—安保闘争の思想的総括』現代思潮社，1960年10月）と批判的に述べている。
- 58) 水溜真由美「谷川雁と三池闘争 「定型の超克」を中心に」, 『KAWADE 道の手帖 谷川雁』, 2009年3月。